

農林漁業用揮発油税財源身替事業  
(県単農免農道整備事業) に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

—飯島町内 その2—

はらばやし  
原 林 遺 跡

2004. 7

長野県上伊那地方事務所  
長野県埋蔵文化財センター

農林漁業用揮発油税財源身替事業  
(県単農免農道整備事業) に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

—飯島町内 その2—

はらばやし  
原 林 遺 跡

2004. 7

長野県上伊那地方事務所  
長野県埋蔵文化財センター



飯島町 上空から



中央アルプスを背にした調査区

# 序

本書は、平成15年度に上伊那郡飯島町本郷地区において、農林漁業用揮発油税財源身替事業（県単農免農道整備事業）に伴い実施した原林遺跡の発掘調査報告書であります。報告書はその成果を記録として保存し、広く一般に周知することを目的として作成しました。

中央アルプスの東麓に広がる飯島町は100を越える遺跡が認められており、その大半が縄文時代中期の遺跡です。それらの遺跡のほとんどは現在の中央道から天竜川にかけての台地の上に点在しています。

伊那谷はかつて、中央道の遺跡調査会の諸先学によって数多くの遺跡が調査され、おびたしい量の情報もたらされました。それらの成果は、現在、縄文時代中期の唐草文土器を語るにはなくてはならないものとなるなど注目を集めています。

原林遺跡の調査の結果、縄文時代中期の住居跡の存在が明らかとなりました。出土品の中には伊那谷特有の唐草文が施された土器をはじめとして、下伊那地方の土器も数多く出土しております。これらの傾向は平成13年度にセンターが調査しました近接する丸山遺跡でも確認されており、上伊那地方南部の地域史を考える上で貴重な資料となります。今回発掘調査された資料が末長く利用されることを期待します。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただいた長野県上伊那地方事務所、飯島町・同教育委員会・同歴史民俗資料館（陣嶺館）などの関係機関、地元的地権者・関係者の方々、また発掘調査・整理作業に携わっていただいた多くの方々に感謝を申し上げる次第であります。

平成16年7月

財団法人長野県文化振興事業団  
長野県埋蔵文化財センター

所長 小沢 将夫

## 例 言

- 1 本書は、農林漁業用揮発油税財源身替事業（県単農免農道整備事業）に伴う上伊那郡飯島町原林遺跡の発掘調査報告書である。
  - 2 発掘調査は長野県上伊那地方事務所の委託を受けた財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが実施したものである。
  - 3 遺跡の概要は長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』20で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
  - 4 整理作業は長野県埋蔵文化財センターで実施した。
  - 5 本書で使用した地図は国土交通省国土地理院発行の地形図「伊那宮田」「赤穂」「伊那」（1:25,000）、飯島町役場発行飯島町都市計画図（1:2,500）、飯島町誌上巻付図・飯島町遺跡分布図等を編集し使用した。
  - 6 委託関係では基差点測量を有限会社 アクセスサーベ、石器実測と石器写真・鑑定を有限会社 アルケアリサーチに委託した。
  - 7 巻頭図版の航空写真は、飯島町役場から貸与・提供を受けたものである。
  - 8 本書の執筆・編集・校正は、藤原直人が行い、調査部長 市沢英利、調査第2課長 平林 彰が全体を校閲した。
  - 9 本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は、飯島町教育委員会が保管する予定である。発掘調査および報告書発行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力をいただいた。お名前を記して感謝の意を表します。（敬称略）
- 飯島町教育委員会 飯島町歴史民俗資料館（陣嶺館） 飯島町飯島陣屋

## 凡 例

1 本書に掲載した実測図の縮尺は、原則として以下の通りである。

a) 遺構実測図

竪穴住居跡 1:60 遺構内施設 1:30

b) 遺物実測図

土器実測図 1:4 土器拓影図 1:3 石器実測図 1:4、1:3、1:2

2 遺物写真の縮尺は以下の通りである。

土器 1:4 石器 1:4、1:3、1:2

# 目 次

巻頭図版

序

例言

本文目次

第1章 序説	1
第1節 調査の経過	1
1 発掘調査委託契約	
2 調査体制と調査概要	
第2節 調査の方法と整理	2
1 発掘調査の方法	
2 整理の方針と報告書の構成	
第2章 遺跡の環境	3
第1節 地理的環境	3
1 地形の概観と遺跡の立地	
2 周辺の遺跡	
第2節 基本層序	4
第3章 遺構と遺物	9
1 検出遺構	9
竪穴住居跡	9
2 出土遺物	11
竪穴住居跡内出土土器	11
遺構外出土土器	15
石器	15
第4章 結語	24

# 第1章 序 説

## 第1節 調査の経過

### 1 発掘調査委託契約

長野県上伊那地方事務所は飯島町本郷地区において農林漁業用揮発油税財源身替事業（県単農免農道整備事業）を計画した。事業地周辺、飯田線を挟んだ東側の隣接地である丸山遺跡は平成13年に発掘が行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡8軒が発見されている。また、建設予定地内には周知の遺跡として、密度の濃い縄文時代中期の集落遺跡の存在が予想され、その結果、原林遺跡は事業に先立つ発掘調査が必要と判断された。

以上のことから、長野県上伊那地方事務所、長野県教育委員会、飯島町教育委員会、長野県埋蔵文化財センターの関係機関が協議し、センターが発掘調査を実施し記録保存を図ることとなった。原林遺跡は表探の結果などから建設予定全域を調査対象としたが、南半については試掘結果をみてから表土剥ぎを行うかどうか判断することとなった。発掘調査およびそれに伴う整理作業は平成15年度（10月20日～3月31日）に行い、報告書刊行は平成16年度に行った。

### 2 調査体制と調査概要

#### (1) 調査体制

平成15年度	理事長 田中康夫 所長 深瀬弘夫 副所長兼管理部長 原 聖 管理部長補佐 上原 貞 調査部長 市沢英利 調査第一課長 平林 彰 調査研究員 藤原直人	平成16年度	理事長 田中康夫 所長 小沢将夫 副所長兼管理部長 藤岡俊文 管理部長補佐 上原 貞 調査部長 市沢英利 調査第二課長 平林 彰 調査研究員 藤原直人
--------	--	--------	---

#### (2) 調査概要

平成15年	10月20日 開始式	12月10日	全景写真等撮影
	10月21日 JR飯田工務区にて 工事工程打ち合わせ	12月11日	基準点測量
	10月27日 機材搬入	12月15日	現場撤収
	10月29日 本格調査開始	12月16日	整理作業開始
	11月21日 七久保小学校6年生、調査見学	平成16年	
		3月31日	整理作業終了

平成15年度から16年度にかけての発掘調査および報告書刊行に向けた整理作業は、センターが管轄した。

#### (3) 発掘調査及び整理作業参加者

北林 瑞穂・小林 要・南谷 秀子・三松 雅春・森谷 勇一・米山 利秋・田井中 志保子

## 第2節 調査の方法と整理

### 1 発掘調査の方法

センターでは調査法の共通認識と調査の統一性を図るため「遺跡調査の方針と手順」を作成し、これに沿って発掘調査を行っている。本調査もこれに従った。

#### (1) 遺跡の名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている「原林遺跡」とした。記録の便宜のため大文字のアルファベットの3文字を用いた遺跡記号「HHB」とした。3文字の先頭の「H」は長野県を9分割した地区の記号で「上伊那」を示し、2・3文字目は「Hara Bayashi」の「H」と「B」を使用し「HHB」を使用した。この記号は今後の保存活用に用いられる。

#### (2) 基準点の設定

測量基準点は国土地理院の平面直角座標の原点（Ⅷ系、 $X=0,0000$ 、 $Y=0,0000$ ）を基点に200の倍数値を選んで、調査区内のX軸・Y軸を測量基準線とした。測量杭の設置は測量業者に委託し実施した。

#### (3) 遺構記号と遺構番号

遺構記号は記録の保存活用のために便宜上つけたものである。本遺跡で該当する遺構記号はSB（2m以上を目安として平面形が方形・円形・楕円形・多角形の掘り込み。堅穴住居跡・堅穴状遺構。）のみであるが、本書では住居跡あるいは、堅穴住居跡と表記した。

#### (4) 測量

遺構の測量は簡易測量により、調査研究員が行った。個別の遺構に関する平面図・断面図（1：20）や全体図・地形コンタ図（1：200、1：100）などは、すべて人手による実測を行い、基準点のデータをもとに配置した。

#### (5) 写真

発掘調査中の遺構等の写真撮影では、6×7判・35mm判カメラと一部デジタルカメラを使用した。6×7判カメラは将来大判に引き伸ばすことが予想されるものに使用し、基本的な遺物出土状態や遺構写真については35mm判カメラ・デジタルカメラを使用した。



手掘りトレンチ調査



七久保小6年生の遺跡見学会

### 2 整理の方針と報告書の作成

発掘調査終了後、整理作業に移行し、遺物の洗浄と注記、並行して図面・写真の分類・整理を行った。遺構実測図・遺物実測図についてはグラフィックソフトを用いたデジタル化を試み本書作成に生かした。



## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

#### 1 地形の概観と遺跡の立地

伊那谷は天竜川の上流域に形成された山間盆地で、中央アルプス（木曾山脈）と南アルプス（赤石山脈）にはさまれた細長い形をしている。原林遺跡は伊那谷のほぼ中央にあたる上伊那郡の南部、中央アルプス東麓の大形扇状地先端に位置する。その扇状地は中央アルプスから流れ出た与田切川によって形成され、東に向かって緩やかに傾斜している。扇状地の最上部である七久保付近の標高は約700m、最下部の天竜川の標高は約510mとほぼ200m近い標高差がある。遺跡の東方には3段の南北方向の段丘が観察される。上から順にみても、原林遺跡の東に隣接する丸山遺跡の東端には断層崖があり、その断層の地殻変動によって形成された南北に長い段丘面が崖の東側に広がっている。さらに東方には国道153号線が走る平坦面、そして最も天竜川に近い最下段の段丘面の3つである。

南北方向に長い段丘は、西から東方向に直交して流下する中小の河川によって分断されている。原林遺跡の南側に接する本郷堤の窪付近を水源とする十王堂沢川がその典型で、堤の窪から流れ出した十王堂沢川は、やがて国道153号線の走る平坦部を流下し、天竜川に合流する。

遺跡はそれら段丘地形の最上段、扇状地先端部の小高い丘陵上、標高657mのところに位置する。



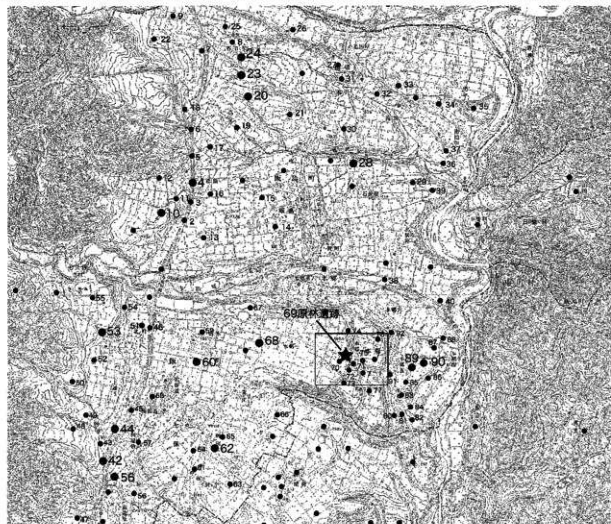
第1図 遺跡位置図

## 2 周辺の遺跡

飯島町は中央アルプスの稜線から天竜左岸にまでおよぶ東西に長い町域をもつが、遺跡が存在するのは山麓から天竜川までの区域の本陣のあった飯島地区、与田切川右岸の本郷地区、更にはその南の七久保地区と天竜川左岸の日曾利地区の4つに大きく分けられる。

飯島地区は太田切川の右岸と与田切川の左岸に挟まれた扇状地上に位置し、その中央部には郷沢川が天竜川に向かって東流している。本地区は大きく分けて現中央高速道沿いの山麓部(西部)と天竜川寄り(中央部)の2地区がある。

山麓部(西部)は中央高速道建設やほ場整備事業のための事前調査によって数多くの遺跡が報告されており、貴重な資料を多数提示している。ことに山溝(4)・岩間上山(10)・高尾第1遺跡(20)などは上伊那南部域を代表する縄文時代中期の集落である。山溝遺跡は、縄文時代中期後半の竪穴住居跡がB地区で7軒、E地区で17軒検出されている。多くの土坑や祭祀的色彩の濃厚な住居跡が確認されている。該期以外では、縄文時代早期と後期前半の土器が出土している。岩間上山遺跡は鳥居龍藏を始めとして、八幡一郎らによっても調査がなされている。本格的な調査が行われたのは、昭和54年の県営ほ場整備によるものであった。縄文時代中期後半の曾利Ⅱ～Ⅲ式に相当する竪穴住居跡が7軒確認されている。現在の中央道東側の台地上にある高尾第1遺跡は、大正時代に鳥居龍藏の考古学的調査から始まり、その後、地元の小学生や在野の研究者らによって土器や石器が収集されていた。昭和55年には県営ほ場整備事業



第2図 飯島町内主要遺跡地図 (1/50,000 : 四角内は遺跡周辺図に対応)

に伴って全面調査が行われ、縄文時代中期中葉から中期後半にわたる竪穴住居跡51軒が発見されている。未調査の地区などを考えると高尾高地には密度の濃い集落があったことが予想される。

飯島地区中央部は現在市街地で、山麓部のような拠点的な集落はほとんど確認されておらず、唯一、堂前遺跡(28)があるのみである。遺跡は昭和53年、県営ほ場整備事業に先立ち調査され、古墳・平安時代の集落、縄文時代中期後葉の住居跡9軒・土坑群、縄文時代後期の配石遺構が検出された。

田切地区は飯島地区の北側、太田切川寄りの一帯で中規模な集落遺跡が確認されている。本地区の比較

的大きな規模の集落遺跡としては、鳥居龍蔵によって初めて本格的な調査がされた町谷遺跡(23)が知られ、昭和49年には県営ほ場整備事業の事前調査によって縄文時代中期後半の8軒の竪穴住居跡が確認されている。また、縄文時代前期末葉の諸磯c式・晩期の水式の土器を出土している太田ノ沢春日平遺跡(8)は、昭和47



遺跡遠景 (南より)



第3図 遺跡周辺図

年の中央道に伴う発掘調査で中期中葉の竪穴住居跡を検出しており、縄文時代前期後半・中期前半・晩期終末まで断続的に続いた遺跡として知られる。

日曾利地区の現在の集落は標高750m前後の高所にあり、山ノ田と呼ばれている。その山ノ田の下方標高600m前後の箇所には小規模な扇状地が形成され、山ノ田A・B・C遺跡や日曾利遺跡など縄文・弥生時代の人間の痕跡が散見される。

本郷地区では24あまりの遺跡が知られ、主に与田切川の右岸に広がる舌状台地の先端付近、十王堂沢川をはさんだ兩岸の地区に縄文中期を中心とする集落跡が展開している。今回報告する原林遺跡もその一角にある。原林遺跡の周辺にも縄文時代の遺跡が数多く存在している。特に原林遺跡の北に接する本郷原林遺跡は昭和56年に調査され、縄文時代中期の住居跡12軒検出し、縄文時代中期を中心として草創期～晩期の土器・石器などを出土している。南側には堤の窪遺跡(70)が、東には丸山遺跡(71)・十王堂坂の上遺跡(75)・椎代林遺跡(79)、南東には中山遺跡(72)・梵鐘造遺構が確認された寺平遺跡(77)・与那田遺跡(76)が知られているところである。また、南東の西岸寺付付近には飯島城遺跡(寺平遺跡に近接)などの中世遺跡が存在する。十王堂坂の上遺跡は、昭和57年の飯島町教育委員会の報告で、縄文時代中期中葉の住居跡13軒・土坑(貯蔵などの穴)106基などが明らかにされている。

七久保地区は飯島地区の山麓部同様、中央自動車道の開発を中心に多くの発掘調査がなされている。旧石器時代の針ヶ平第1遺跡(61)、縄文時代早期では赤坂遺跡(53)・カゴ田遺跡(60)、縄文時代中期を中心とした集落では鳴尾天白遺跡(42)・高遠原遺跡(56)・尾越遺跡(44)が知られている。

高遠原遺跡は県営ほ場整備事業の事前調査、他2遺跡の調査は中央道建設に伴うものである。高遠原遺跡は急傾斜地上にあり、水田造成の破壊を受けているものと考えられている。検出遺構は1軒の竪穴住居跡の他、3か所の大形竪穴状遺構・30数基の土坑など遺構の確認数こそ少ないものの、大形竪穴状遺構が土坑(墓)群の中に存在するという特殊性を考えると貴重な調査であったといえる。

鳴尾天白遺跡は昭和46年、中央道建設に伴い発掘調査され調査区内からは縄文時代中期中葉末から後葉の竪穴住居跡10軒、土坑36基が検出されている。本遺跡は高遠原遺跡から道を隔てた南東にあり、時期的にもほぼ同時期と考えられることから、あるいは、同じ集落の範疇でとらえられるべきものかもしれない。

尾越遺跡は中央道建設に伴い昭和46年発掘調査されている。その際検出された遺構は縄文時代中期中葉後半の竪穴住居跡24軒・後期前半の竪穴住居跡4軒・配石遺構8基・土坑101基を数える。中期後半の24軒の竪穴住居跡は、大きく3期に時期区分される可能性が示されている。該期の出土土器のなかに東海地方との交流を示す土器が数多く出土しているのは注目される。

#### 引用、参考文献

- 長野県教育委員会 1973 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡飯島町その3 駒ヶ根市内』
- 長野県教育委員会 1972 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 上伊那郡飯島町その1』
- 長野県上伊那郡飯島町 1980 『県営ほ場整備事業(昭和54年度) 岩間上山・岩間城 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書』
- 長野県上伊那郡飯島町 1981 『埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 高尾第1・本郷原林遺跡・田切平沢』
- 飯島町 飯島町教育委員会 1994 『平成6年度 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 うなぎ沢・陣馬』
- 長野県上伊那郡飯島町教育委員会 1978 『昭和52年度 埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 カゴ田・高遠原』
- 飯島町教育委員会 1987 『埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 針ヶ平第1遺跡』
- 長野県上伊那郡飯島町 1982 『県営ほ場整備事業埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 十王堂坂の上遺跡』
- 飯島町教育委員会 2000 『県営早農道整備事業本郷地区埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 若森社遺跡・南羽場遺跡』
- 飯島町誌編纂刊行委員会 1990 『飯島町誌 上巻 自然 原始・古代編』 飯島町役場

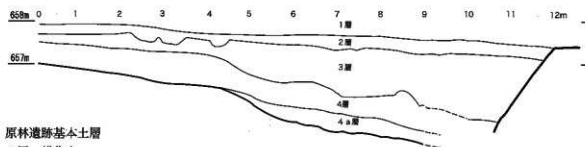
番号	遺跡名	所在地	先土層	縄文時代					弥生時代					古代	中世	備考
				早期	前期	中期	後期	晩期	前期	中期	後期					
1	うらん坂西	飯島町飯間		○	○	○		○								
2	うらん坂東	飯島町飯間				○		○				○				
3	うらん坂東	飯島町飯間				○		○				○	○		S47 中央道	
4	山跡	飯島町飯間				○		○								
5	八幡神	飯島町西区														
6	石上神社跡	飯島町飯間			○	○						○			S48 中央道	
7	庚申平	飯島町山切				○		○							S48 中央道	
8	太郎田巻百早	飯島町飯間				○		○							S47 中央道	
9	久保平	飯島町飯間				○		○							S64	
10	辺野上山	飯島町飯間	○	○	○	○										
11	高の平	飯島町飯間				○		○								
12	飯間中原	飯島町飯間			○	○										
13	大志野田	飯島町飯間				○		○								
14	上の原 1	飯島町飯間				○		○								
15	七の原 2	飯島町飯間				○		○								
16	竹園城(町跡)	飯島町飯間				○		○							S55	
17	竹園神の洞	飯島町飯間				○		○								
18	西元藩 3	飯島町飯間				○		○								
19	西元藩 2	飯島町飯間			○	○										
20	高尾原 1	飯島町飯間				○		○							S66 中央道	
21	飯間	飯島町飯間				○		○								
22	飯間	飯島町飯間				○		○								
23	飯間	飯島町飯間				○		○							S65	
24	藤井平千原	飯島町飯間				○		○								
25	久保平家	飯島町飯間			○	○										
26	山の神	飯島町飯間				○		○								
27	孔子廟	飯島町飯間				○		○								
28	吾妻神社跡	飯島町飯間				○		○								
29	大野	飯島町飯間				○		○								
30	飯間	飯島町飯間				○		○								
31	泊引	飯島町飯間				○		○								
32	飯間	飯島町飯間				○		○								
33	北河原	飯島町飯間				○		○								
34	中平	飯島町飯間				○		○								
35	田切月夜平	飯島町飯間				○		○								
36	芋沢	飯島町飯間				○		○							S56	
37	塚外	飯島町飯間				○		○								
38	小波	飯島町飯間				○		○								
39	唐沢城跡	飯島町飯間				○		○								
40	トヤゴ城跡	飯島町飯間				○		○								
41	藤島守屋	飯島町飯間				○		○								
42	城址西側	飯島町飯間				○		○							S46 中央道	
43	城址	飯島町飯間			○	○									S47 中央道	
44	城跡	飯島町上通り				○		○							S46 中央道	
45	飯間	飯島町飯間				○		○								
46	北河原	飯島町北村			○	○										
47	三木	飯島町飯間				○		○								
48	飯間	飯島町飯間				○		○								
49	中河原	飯島町上通り				○		○								
50	月夜平	飯島町飯間				○		○							S51	
51	北河原	飯島町北村				○		○							S55	
52	北村西側	飯島町飯間				○		○								
53	武原	飯島町飯間				○		○							S49	
54	寺井(中瀬)	飯島町飯間				○		○								
55	千人塚	飯島町飯間				○		○								
56	高尾原中原	飯島町飯間				○		○							S61 北は高尾原	
57	新田敷	飯島町飯間				○		○								
58	飯間	飯島町飯間				○		○							S60	
59	飯間	飯島町飯間				○		○							(山崎遺跡 S62)	
60	カゴ山	飯島町飯間				○		○							S61	
61	餅ヶ平跡 1	飯島町七久保	○			○		○								
62	餅ヶ平跡 2	飯島町飯間				○		○								
63	餅ヶ平跡 3	飯島町飯間				○		○								
64	山の神	飯島町飯間				○		○								
65	飯間	飯島町飯間				○		○								
66	飯間	飯島町飯間				○		○								
67	寺前北	飯島町飯間				○		○								
68	寺前 1	飯島町飯間				○		○								
69	飯間	飯島町飯間				○		○								
70	飯間の森	飯島町飯間				○		○								
71	丸山	飯島町飯間				○		○								
72	中川	飯島町飯間			○	○										
73	寺林	飯島町飯間				○		○								
74	大見山	飯島町飯間				○		○								
75	十王堂敷の上	飯島町飯間				○		○							S57 中央道	
76	年寄田	飯島町飯間			○	○										
77	寺平	飯島町飯間				○		○							S54 飯間遺跡	
78	乃那跡	飯島町飯間				○		○								
79	糠代林	飯島町飯間				○		○								
80	大町	飯島町飯間				○		○								
81	飯間内	飯島町飯間				○		○								
82	餅の田	飯島町飯間				○		○							S48	
83	飯間	飯島町飯間			○	○										
84	飯間	飯島町飯間				○		○							S58	
85	北村	飯島町飯間				○		○								
86	飯間	飯島町飯間				○		○								
87	飯間北	飯島町飯間				○		○								
88	飯間	飯島町飯間				○		○							S56 中央道	
89	山平	飯島町飯間				○		○								
90	木間中平	飯島町飯間				○		○								
91	十七堂敷	飯島町飯間				○		○								
92	飯間山	飯島町飯間				○		○								

第1表 飯島町遺跡分布一覧

## 第2節 基本層序

飯島町天竜川以西一帯は中央アルプスから押し出された土砂による扇状地が発達し、その上に火山灰やロームが覆って形成されている。調査時の遺構確認面はローム層直上として当初は人力によるトレンチ調査（JR線に隣接するため重機の使用に制限が設けられていたため）を行った。しかし、遺物は数多く出土するものの、遺構には当たらず、ロームブロックに混ざってビニール製品・空缶などが出土するなど遺構検出面とはほど遠いものであり最深度では3m強を測った。その結果から、本調査区内は何回かの土地造成がなされていたことが判明した。人力によるトレンチ調査終了後、重機による表土剥ぎを行ったが、遺構の存在したと考えられるローム層上部はほとんど削平されていたため基本的な土層の把握は困難であった。（第5図）

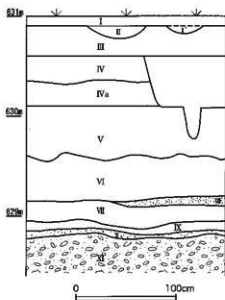
4a層を掘り抜くことができなかったため、参考までに東に隣接する丸山遺跡の基本土層（第6図）を載せておく。



原林遺跡基本土層

- 1層 耕作土
- 2層 ローム混入ブロック (盛土)
- 3層 褐色・ロームブロック (盛土)
- 4層 黄色土
- 4a層 黄色土 小石混入

第4図 基本土層



丸山遺跡基本土層図

土層説明

I層：黄土層

I'層：黒褐色土 (10YR3/2) 木の板の痕跡

II層：黒褐色土 (10YR5/8)

III層：明黄褐色土 (10YR6/8) 疑似ローム。やや粘性あり、層厚30～40cm。

IV層：明黄褐色土 (10YR6/8) 遺構確認面。やや粘性あり、IV層より締まりあり、新鼠アフラより粗粒で構成される。

IVa層：明黄褐色土 (10YR6/8) やや粘性あり、IV層より緩みあり。

V層：明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性があるが、緩みあり。

VI層：黄褐色土 (10YR7/8) 緩みあり、粘性強く硬質。

VII層：黄褐色土 (10YR7/8) 緩みあり、粘性強く硬質。

VIII層：明黄褐色土 (10YR6/8)

IX層：御岳第 軽石層

X層：にぶい黄褐色土 (2.5YR5/4)

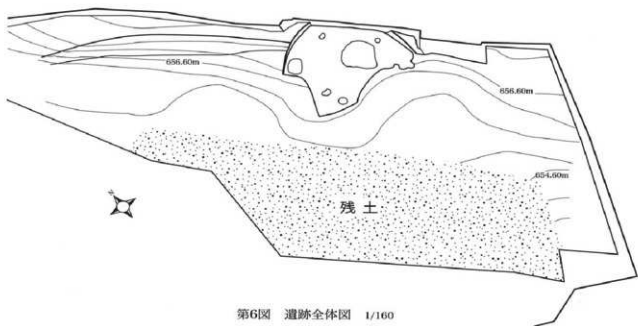
XI層：人頭・こぶし大の礫層。X層が礫の面に入り込む。

※遺構はIV層上面で確認されている。

第5図 丸山遺跡基本土層

## 第3章 遺構と遺物

調査区は十王堂沢川に面した南斜面にあり、後世の土地造成によって起伏は削られ、盛土によって当時の微地形を思い描くことは不可能な状態である。



第6図 遺跡全体図 1/160

### 1 検出遺構

#### 1号竪穴住居跡 (第7図 PL1)

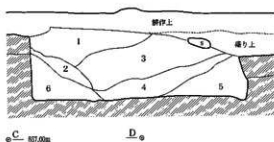
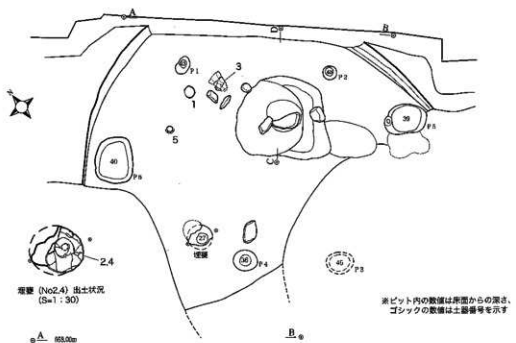
##### 検出状況

調査区の北東側壁面に食込む形で検出された。他の遺構との重複関係は北側が調査区外、南側は削平によって削られているため不明である。本跡の検出状況は旧地形の法面勾配地であった。造成による攪乱が激しく、しかも道路幅の調査区内のためはたして旧地形に於いて法の勾配がいか程であったか察するのは難しい。ただ十王堂沢川の浸食を受けていたことは明らかなことと思われるため、当時の勾配は現在より緩やかであったろう。

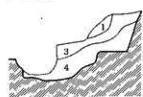
規模は北壁と東壁の一部以外は確認出来なかったため不明であるが、推定して考えると長軸は東西方向で長さは約6m程、東西の短軸で5.5m内外である。検出面からの深さは最大で45cm(調査区壁面の観察では壁の高さは最大で110cm)を測る。平面形は東西に長い楕円形と考えられるが、検出された壁面の範囲が限られることから、推定の域を出るものではない。



調査区全景



0 (1:50) 2m



1. 褐色土 (10YR 4/6) : 粘性・しまり有り。
2. 褐色土 (10YR 4/6) : 1層に比べしまりに欠ける。
3. 褐色土 (10YR 4/5) : 炭化物粒子 (径約10mm) を多く混入する。粘性有り、しまり弱い。土層内を比較的多く混入する。
4. 褐色土 (10YR 4/6) : 炭化物粒子 (径約10mm) を少量混入する。粘性有り、しまり弱い。土層内を比較的多く混入する。
5. 岩屑土 (10YR 5/6) : 粘性・しまりともに強い。6層に比べ色調が暗い。
6. 黄褐色土 (10YR 5/8) : 粘性・しまりともに強い。5層よりさらにしめる。

第7図 1号竪穴住居跡

覆土は6層に分層された。これらの土層の埋まった様子は、まず下層に(5・6層)地山のロームと見分けのつかないしまりのある黄褐色土が入り、中層には炭化物の粒子や土器小片を含んだやや粘性のある3・4層、その上部には1層の褐色土が認められる。

遺構の状況

壁は残存する部分ではほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、東側の壁面直下には周溝が一部見られる。床は貼床ではなく地山のロームを敲き締めた、硬化面である。硬化の範囲は現存する床面の観察から炉周辺に限られ、南側については削平のため床面は削れられたと判断できた。

ピットは6基検出された。この内P1～P4が主柱穴と考えられるが、4本柱であったかどうかという確証はない。P5・P6については貯蔵穴などの施設に関わるものと捉えられる。

炉は住居跡中央部の東寄りに設けられている。規模は掘り形で121cm(南東側のテラス状に広がっている浅い掘込みの箇所を含めると161cm)、深さ50.5cmを測る。本跡の炉は本来、石囲炉であったと思われるが残存していたのは3個の炉石にとどまる。検出作業中に炉の上部から2つの人頭大の礫が客土



とともに出土していることから、炉の上面が攪乱を受けていたことがわかる。炉底は最深部を中心に焼けていた。炉内部の土壌は焼土粒子・炭化物粒子が混入しているが、全体にまんべんなく散在していることから、炉石の採取、あるいは廃棄行為のためであろう。

#### 遺物出土状況

遺物の出土量は比較的多い。炉跡周辺の土器（第8・9・10図、1～5）は床面出土と捉えられる。他の地点から出土したもの（第10・11図、6～16）は破片資料が多く、ことに覆土中出土であることから破棄されたものと考えられる。石器では完形の打製石斧が床面から2点（第12図3・8、PL2）、炉の覆土から3点（第12・13図9・10・13、PL2）出土している。また、床面からは刃器（第14図22、PL3）と敲石（第14図25、PL3）がそれぞれ1点、P5からは横刃形石器が1点（第13図18、PL3）出土している。

遺構の時期は、縄文時代中期後葉前半である。

## 2 出土遺物

### 竪穴住居跡内出土土器（第8～11図、1～16）

1はやや小型の深鉢の口縁部で3つの把手が観察されるが、本来は4単位であったと考えられる。3つの把手のうち2つは羊の角状の把手で対をなし、もう1つは「し」の字状で本来は対をなしていたものと考えられるが欠損している。各把手からは1条の隆帯が垂下しているのがうかがわれる。口唇部は無文帯でその無文帯は1条の水平な沈線で区画されている。その下位は沈線文で充填されている。

2は唐草文系の樽形になる深鉢の胴下半部で、中央に沈線文の施された太い隆帯文が垂下し4単位に区画しているものと思われる。胴部下位には渦巻きを伴う沈線により弧状に区画され、地文には綾杉状の沈線が施されている。

3は深鉢の胴下半部で、地文の縄文はLRの縦方向施文で、2条を1単位とする沈線が4単位垂下している。

4は深鉢の胴下半部で、底部には木葉痕がみられる。内面には内底面より5cm以上上位に著しい煮焦げの痕跡が（図中の網掛範囲）認められる。

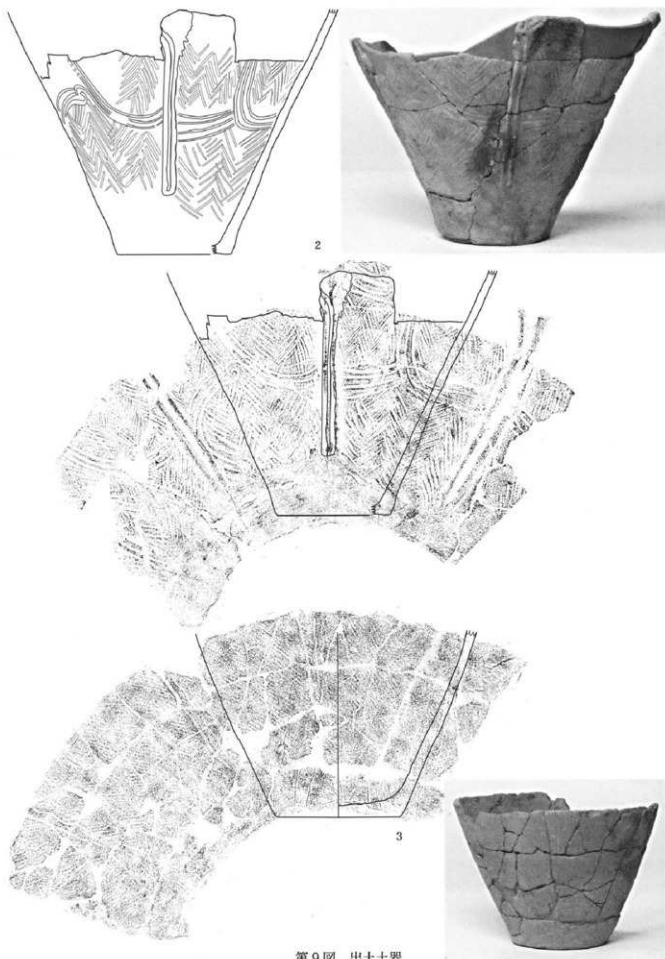
5は小振りな深鉢の胴下半部で7本の隆帯と1条の蛇行沈線が縦位に施され、その間は横位の沈線文や矢羽状の沈線が充填されている。

6は加曾利E系の深鉢片で、口縁部には隆帯により横位区画され、その内部には横位方向のLR縄文が施文される。ややくびれのある頸部には横方向のLR縄文の地文上に縦位方向の沈線が施されている。（図中内面の網掛は煮焦げの痕跡）

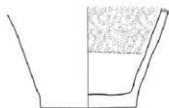
7は小振りなキャリーパー形の深鉢で、口唇部内面には横位方向に1条の細い隆帯の貼付が施されている。口縁部は隆帯の貼り付けによる渦巻き文が施文され、その周囲は縦位方向の沈線が施文されている。口縁部から頸部にかけてのくびれ付近には、区画するように2条の隆帯が横位方向にめぐっている。胴



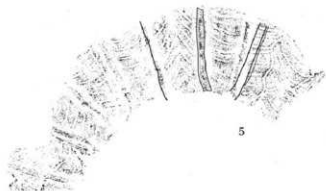
第8図 出土土器



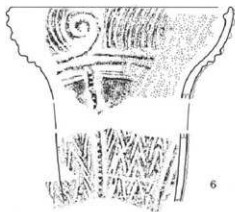
第9圖 出土土器



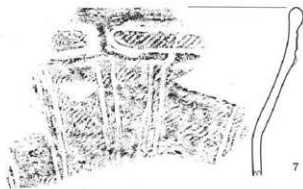
4



5



6



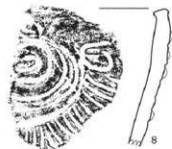
7



9



10



8

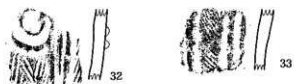
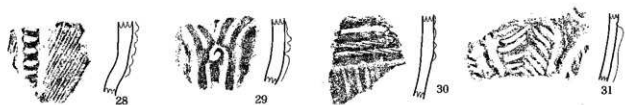
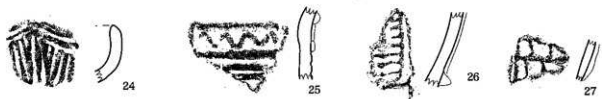
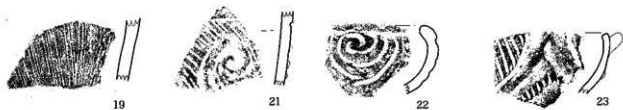
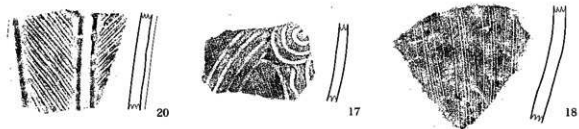
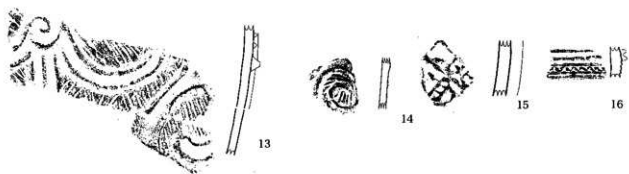


11



12

第10图 出土土器



第11圖 出土土器

部には刻み目をもった隆帯が縦位方向の貼り付けられている。胴部の地文は綾杉状の沈線が用いられている。内面には煮焦げの痕跡をとどめている。

8・9は同一個体と考えられる。隆帯による渦巻き文を全体に配した樽形の唐草文系と考えられる。地文は隆帯の間を充填するように描かれた沈線である。

10は「U」字形の突帯を持つ口縁部片で、縦位の細隆起線文が施文されている。

11は口唇部を欠くキャリパー形の深鉢胴片で、地文はLRの縄文が縦位方向に施文され、文様は沈線による渦巻きのモチーフが描かれている。

12はやや肥厚した口縁部に沈線による横位の区画文様が描かれている。

13・14は細隆起線文により渦巻きや曲線をモチーフに描かれた唐草文系の胴部片で、地文は条線様の沈線である。

15は断面が三角形を成すような隆帯によって描かれている胴部片で、梯子状の貼り付けなどが見られることから下伊那に多い系統の土器と考えられる。

16は横位の隆起線文と交互刺突文が特徴的な唐草文系の土器片である。

#### 遺構外出土土器 (第11図、20～33)

17・18・19は地文に主に縦位方向の条線が施文されている。17では渦巻きを中心に沈線によるモチーフが描かれている。

20・28は矢羽を思い起こさせるような斜位の沈線を地文として隆帯(28では刻み目がある)が縦位に貼り付けられている。

21は斜位の沈線を地文として沈線による渦巻きが描かれている。

22・24・29は沈線によって渦巻きなどの文様が描かれており、主に下伊那に多い土器であろうか。

23はキャリパー形の深鉢で、全体的に作りが薄くしまりのある口縁部である。山形の太い隆帯が貼り付けられその下位には刻み目のある隆帯がみられる。口縁部の地文は縦位の沈線が用いられている。

25は横位の隆帯が施文され、隆帯の間には波状のソウメン状張付け文が施されている。

26・27は断面が三角形の隆帯が貼り付けられている土器片、主に下伊那に多く見受けられるものと考えられる。

30は4条の横位隆帯が張り付けられ、その間に1条の沈線と2条の斜行する連続刺突の施された沈線が配置されている。下位には縦位の浅い沈線が施文されている。

31は樽形土器の胴部片で、両脇に沈線を伴った隆帯で区画され区画内には矢羽状の沈線が施されている。

32は渦巻き文と縦位に垂下する隆帯によって描かれ、地文には綾杉状の沈線が見られる。

33はキャリパー形の深鉢の胴部で、LRの縦位方向施文の縄文を地文とし、縦位の沈線が描かれている。

#### 石器 (第12～14図、PL2.3)

1・2は磨製石斧である。1は偏刃である。左右両側縁に敲打痕が顕著に見受けられる。刃先には敲打痕や剥離状痕が観察される。2は基部と裏面に敲打痕が顕著に見受けられる。刃部は丁寧に研磨されている。2点ともに凝灰岩製である。

3～13は打製石斧である。3～5は楕形、6～12は短冊形、13は不明である。3は右側縁と刃部に使用による磨耗が観察される。表面には原礫面が残置している。4は両側縁に使用によるつぶれが見受けられる。表面には原礫面が残置している。5の刃部は欠損後、再使用されており先端に微細剥離痕

が観察される。両側縁は使用によるつぶれが見受けられる。6の刃部は表裏ともに使用による磨耗が顕著である。両側縁は使用によるつぶれが見受けられる。表面には原礫面が広く残置している。7は基部に原礫面が残置している。表面には節理面が見受けられる。右側縁は垂直剥離を施し刃潰し状の側縁を作出している。8の刃部は使用により磨耗している。右側縁は垂直剥離で作出している。表面には原礫面を広く残置している。9の刃部は使用により磨耗している。10の基部は破損後、再び調整を施している。両側縁には敲打を施しており、痕が顕著に見受けられる。裏面は使用による磨耗が顕著である。11は刃部の磨耗が非常に顕著である。12は基部の両側縁に敲打痕が観察される。表面には原礫面が広く残置している。13は刃部を欠損している。両側縁は垂直剥離と敲打により作出している。表面には原礫面を広く残置している。11は珪岩製、12は凝灰岩製、その他は砂岩製である。

14は砂岩製の縦型石匙で、刃部には微細剥離痕が認められる。左側縁に原礫面を残置している。

15～21は横刃形石器である。15は背部と刃部に表裏両面から調整を施している。左側縁は事故剥離と思われる。16は刃部中央の辺りにつぶれが観察される。背部は裏面側に調整を施し厚みを除いている。17は裏面と背部は節理面である。刃部は調整により厚みを除いており、また微細剥離痕が観察される。18～20は厚みを除くような調整は認められない。刃部に微細剥離痕が観察される。19の表面の剥離面は打点が認められないことから素材剥片を剥離する以前の剥離面であると考えられる。20の左側縁は事故剥離と思われる。21は表面に原礫面を広く残置している。素材剥片の打点付近に抉り状の調整を施しており、また刃部にも見受けられる。すべて砂岩製である。

22は凝灰岩製の石器である。両側面は節理面である。下部には微細剥離痕が認められる。表面に原礫面が残置している。

23は片岩製の石錘である。礫の上下に調整により抉りを作出しており、使用によると思われる磨耗が見受けられる。

24・25は敲打石である。24は凝灰岩製であり、縁辺に敲打痕が観察されるが、特に上下が顕著である。下部には剥離状痕も見受けられる。25は砂岩製である。全周にわたり敲打痕が観察される。表裏面には擦痕も見受けられる。

26は砂岩製の石皿である。非常に大形であり、表面のみの使用である。三方に縁をもち、一方は開いている。磨面が明瞭である。

27～29は凹基の石鏃である。27は左脚部と先端が欠損している。比較的丁寧に調整を施している。チャート製である。28は黒曜石製であり、丁寧に調整を施している。29は黒曜石製であり、横長剥片を素材としている。表面には原礫面を残置している。

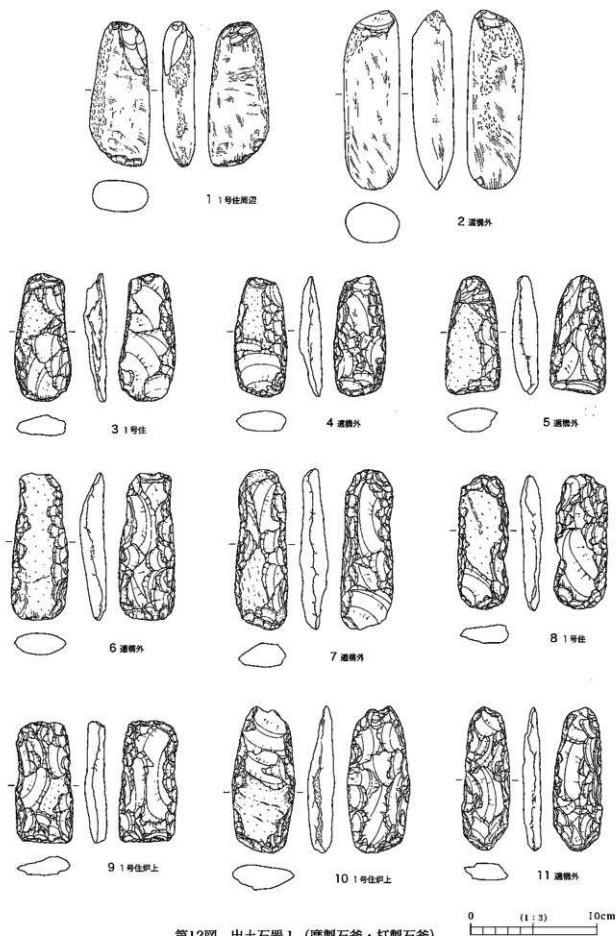
30は黒曜石製の微細剥離痕のある剥片である。右側縁に微細剥離痕が観察される。左側縁は事故剥離と思われる。表面に原礫面を残置している。

#### 参考文献

- 三上敏也 2002 「所謂「唐草文」の構造・変遷と型式名に関する考察」『長野県考古学会誌』98
- 下平博行 1999 『大門原遺跡』長野県飯田市教育委員会
- 飯島町誌編纂刊行委員会 1990 『飯島町誌・上巻・自然、原始古代編』飯島町役場

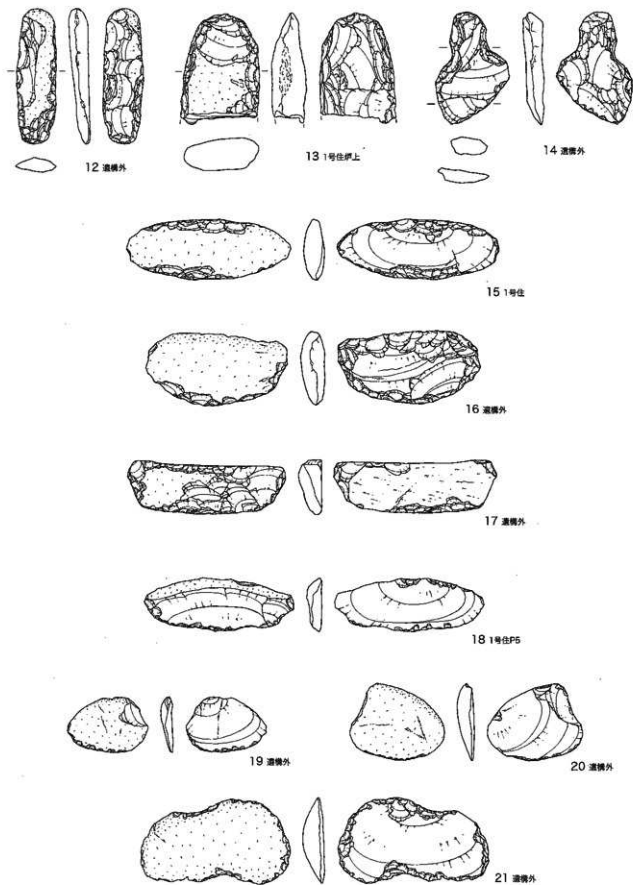
図版No.	器種	石材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	形態	素材	完形	出土地点
1	磨製石斧	凝灰岩	113.49	48.71	24.68	246.2	乳棒状	不明	完形	1号住周辺
2	磨製石斧	凝灰岩	140.48	43.65	30.57	358.7	乳棒状	不明	完形	遺構外
3	打製石斧	砂岩	101.35	44.52	18.00	85.6	楕形	横長剥片	完形	1号住床面
4	打製石斧	砂岩	95.70	41.87	18.30	81.1	楕形	横長剥片	完形	遺構外
5	打製石斧	砂岩	94.49	43.28	20.05	98.6	楕形	横長剥片	完形	遺構外
6	打製石斧	砂岩	116.41	43.99	18.44	121.7	短冊	横長剥片	完形	遺構外
7	打製石斧	砂岩	127.24	42.48	23.01	133.8	短冊	横長剥片	完形	遺構外
8	打製石斧	砂岩	106.51	41.35	15.22	83.0	短冊	横長剥片	完形	1号住床面
9	打製石斧	砂岩	97.03	46.24	16.81	92.2	短冊	横長剥片	完形	1号住炉上
10	打製石斧	砂岩	114.96	49.00	20.84	137.4	短冊	横長剥片	完形	1号住炉上
11	打製石斧	珪岩	113.21	38.40	14.35	74.3	短冊	横長剥片	完形	遺構外
12	打製石斧	凝灰岩	106.41	32.85	13.61	61.3	短冊	扁平礫	完形	遺構外
13	打製石斧	砂岩	86.47	62.13	25.97	185.7	不明	横長剥片	刃部欠	1号住炉上
14	石鏃	砂岩	88.12	60.79	16.32	70.6	縦型	横長剥片	完形	遺構外
15	横刃	砂岩	47.66	129.59	14.89	98.1		横長剥片	完形	1号住
16	横刃	砂岩	58.49	113.16	19.73	153.7		横長剥片	完形	遺構外
17	横刃	砂岩	40.83	128.60	17.07	109.5		扁平礫	完形	遺構外
18	横刃	砂岩	41.70	118.70	12.34	51.5		横長剥片	完形	1号住 P5
19	横刃	砂岩	44.09	64.12	9.43	24.0		横長剥片	完形	遺構外
20	横刃	砂岩	60.91	76.48	13.33	63.3		横長剥片	完形	遺構外
21	横刃	砂岩	70.71	119.93	15.57	143.9		横長剥片	完形	遺構外
22	刃器	凝灰岩	77.68	122.43	22.70	181.6		不定形剥片	完形	1号住床面
23	石鏃	片岩	71.95	59.25	11.29	67.8		扁平礫	完形	遺構外
24	敲石	凝灰岩	108.28	33.79	13.26	69.7		扁平礫	完形	遺構外
25	敲石	砂岩	143.02	79.85	45.34	761.8		礫	完形	1号住床面
26	石皿	砂岩	361.80	331.10	105.20	15500.0		扁平礫	完形	遺構外
27	石鏃	チャート	36.39	16.44	3.84	1.7	凹基	不明	左脚部・先端欠	遺構外
28	石鏃	黒曜石	19.39	17.92	3.28	0.6	凹基	不明	完形	遺構外
29	石鏃	黒曜石	16.14	10.16	2.52	0.2	凹基	横長剥片	完形	遺構外
30	縦型剥離痕のある剥片	黒曜石	22.18	10.36	3.90	0.8		縦長剥片	完形	遺構外

第2表 石器計測表

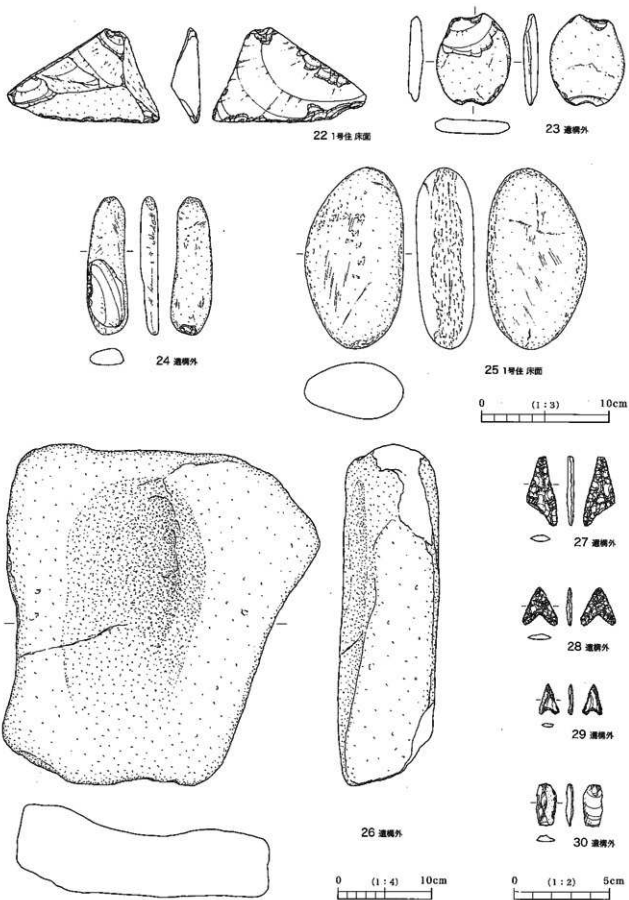


第12图 出土石器 I (磨製石斧・打製石斧)





第13圖 出土石器2 (打製石斧・石匙・横刃)



第14図 出土石器3 (刃器・石錘・敲石・石皿・石鏃・微細剝離痕のある剥片)



1号整穴住居跡



左：土器 NO.3 出土状況  
右：土器 NO.1 出土状況



左：土器 NO.5 出土状況  
右：土器 NO.2,3 出土状況



1 1号住用刃

2 遺構外

3 1号住

4 遺構外

磨製石斧

(1:3)

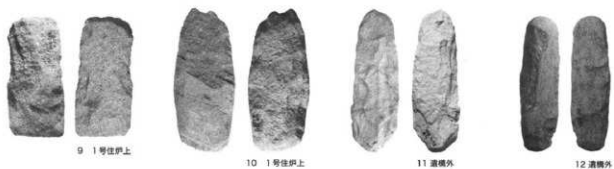


5 遺構外

6 遺構外

7 遺構外

8 1号住



9 1号住伊上

10 1号住伊上

11 遺構外

12 遺構外



13 1号住伊上

打製石斧

(1:3)



15 1号住



16 遺構外



17 遺構外



14 遺構外

石匙

(1:3)

横刃

(1:3)



18 1号住PS



19 遺構外



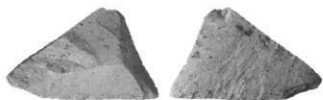
21 遺構外



20 遺構外

横刃

(1:3)



22 1号住 水面

刃器 (1:3)

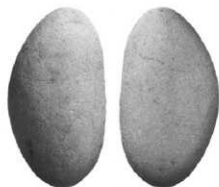


23 遺構外

石錘 (1:3)



24 遺構外



25 1号住 床面

敲石 (1:3)



26 遺構外

石皿 (1:4)



27 遺構外



28 遺構外



29 遺構外

石鏃



30 遺構外

微細剥離痕のある剥片

(1:2)

## 第4章 結語

本遺跡の周辺では、1980（昭和55）年度の県営ほ場整備に伴って調査された本郷原林遺跡（飯島町教育委員会）では縄文時代中期後葉を中心とした時期の竪穴住居12軒、数基の土坑が確認されている。また、2002（平成13）年度、JR線を越えて東側に位置する丸山遺跡の調査では、縄文時代中期中葉から中期後葉の竪穴住居跡9軒と土坑4基が確認され、東海・関東・東北地方の影響のある土器が出土した。

今回の調査は県単の農道整備事業であり、農道幅の調査で面積が700㎡と狭小であったため当初予想していた遺構数にはおよぼす縄文時代中期後半の竪穴住居跡1軒の調査となった。

本調査区は本郷原林遺跡の一角、南端であり、JR線をはさんではいるが東側に位置する丸山遺跡も本来同一の村であったことが想定されている。3回の調査によって検出された縄文時代中期の竪穴住居跡軒数は本郷原林遺跡が12軒、丸山遺跡が9軒、そして今回の1軒、合計22軒となり調査に至っていない地区や破壊を受けた地区などを考えると相当な規模の集落跡であることが考えられる。また、本郷地区の丘陵上の遺跡は、過去、単発的に調査さまざまな成果を残している。原林遺跡の南にあたる「堤の窪」と呼ばれる窪地周辺や十王堂沢川の両岸には堤の窪遺跡や十王堂坂の上遺跡、中山遺跡など縄文時代の中期を中心とした遺跡が確認されており、なかでも丸山遺跡のある「丸山」と呼ばれる小丘陵周辺は、堤の窪や十王堂沢川を水場とする縄文の村が成り立っていたといっても過言ではないと思われる。あるいは、「丸山」という小丘陵を中心としたテリトリーが成立していたのではないかと考えられる。

近年、伊那谷では中期中葉から後葉にかけての集落跡の調査が増加しつつあり、該期の遺物出土量もそれに比例して増加している。本遺跡は、伊那谷の中でも上伊那・下伊那の中間に位置することから、両地域の土器や折衷色の強い土器が出土している。これらのことから、やや混乱傾向にあった土器の編年にも資料の増加に伴いいくばくかの進展が見られるものと予想される。平成13年の丸山遺跡の調査では東海地方の北屋敷式土器や東北地方の大木式土器に比定される土器が出土し、今回の原林遺跡では東海地方の影響を受けたと考えられる下伊那系土器が出土している。特に大木式土器に至っては山形・宮城地方を中心とする土器であることを考えると単なる土器の移動以上の様態を考えてしまう。まさに他地域との交流を示すものとして興味深い。本遺跡の資料が他地域との交流研究の一助になることを願いたい。

## 報告書抄録

書名	農林漁業用揮発油税財源身替事業（県単農免農道整備事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —飯島町内 その2—							
ふりがな	のうりんぎょぎょうよう きはつせざいざいげんみかえりじぎょうにともなうまいどうぶんかざい はつかつちようきほうこくしょーいじまちないー							
副書名	原林遺跡							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	67							
編著者	藤原直人							
編集機関	(財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市藤ノ井布施高田 963-4 TEL 026-293-5926							
発行年月日	2004年（平成16年）7月30日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
はらばやしせいせき 原林遺跡	ながのけんかみいなくん 長野県上伊那郡 いじまらほんごう 飯島町本郷	3840	54	35度39分 43秒	139度15分 54秒	平成15年10 月20日～12 月15日	700㎡	県単農免農道 事業
所収遺跡名	立地	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項		
原林遺跡	天竜川以西 の段丘端部	集落	縄文時代中期後半	竪穴住居跡	土器・石器・ 土製品	扇状地先端部の集落跡		

### 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書67

農林漁業用揮発油税財源身替事業（県単農免農道整備事業）に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

—飯島町内その2—

原林遺跡

発行 平成16年（2004年）7月30日

発行者 (財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市藤ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926

FAX 026-293-8157

印刷 信毎書籍印刷株式会社

